

旅の話 (二)

渡辺美知夫

大きなタンホール函に無雑作に詰めこまれた中から、一九八六年とある手帖を抜き出してみたら、その年までに十四回にわたって欧州諸国を旅したメモが目についた。多くは年一回、時には二回、一度は年に三回出掛けている。十二回目のスカンジナビアの旅では、フィンランドの、森と湖の多い、落付いた佇まいと、デンマークではFynという島に、アンデルセンの生まれ故郷 Odense を訪れたことが格別の想い出になっている。バスが客を乗せたまま大きなフェリーに送りこんだのも、初めての経験であった。十三回目はシシリー島、マルタ島、ローマとある。シシリー島にノルマン人の強力な王朝があったことを知り、この島の文化史的重要性に気付かされて驚いた。早春の旅だったので、たしか Taormina という町の、美し

い小さな公園から遠望した、雪を頂いた Etna 山の秀麗な姿が忘れられない。そのとき撮った雪山の遠望を今も居間に掲げて懐しんでいる。タオルミナの公園では、通路の舗装が、雨水を吸収できる、小さな孔の多いタイル張りであったことが心に残った。こういう舗装にすれば、大都会に大雨が降ると、重い構けぬ洪水が起こったりすることが、なんとか避けられるのと思ったことであった。

Malta 島では、ついこの間までイギリス領であった名残を、ホテルのボーイの挙措にも感じて懐しかった。

さて、旅の行先で一番多いのが、私の仕事柄当然イギリスということになる。一九七二年七月か

ら九月にかけて、Great BritainとIrelandを、touring map片手に駆け回ったのを皮切りに、七三年、七五年、七七年、八二年などと回を重ねているが、tour leaderは殆んど常に、当時上智大学の英文科教授であったPeter Milward神父であった。先生にとつてこれらの旅は、お里帰りの恰好の便法でもあったらしい。そのうち八二年の夏休みに、Scotland, England, Walesと、西海岸傳いに南下してみたとき、海岸沿いの街道近くのそちこちに、四角い小さな囲いの跡が、点々と眼についたので、先生に尋ねたところ、昔Irelandから渡って来た修道僧 (monks) たちの庵室の跡だということ、それが私の日頃考えていたことと見事に符合するので、強い感銘を覚えたことであつた。

ブリテン島にキリスト教を伝えたのは、アイルランドのケルト系の修道僧たちであつた。例えば六世紀にSt. Columbaがスコットランド西南部の小島Ionaに草庵 (monastery) キリシヤ語で独りで暮らす意) を拓いたこと、更にその後その系

統がブリテン島に拡がり、東海岸の Lindisfarne (Holy Island) が一大據点となつたが、他方ローマでは、法王Gregory Iの命により、St. Augustineが伝道団を組織してイギリスに向い、據点としたのがイギリス東南端に近いCanterburyであつたといふことになる。その宗旨は言うまでもなくCatholicismである。

カトリック教は教会を中心とする。つまり集団主義を宗是とする宗教である。その点北方のLindisfarneのmonasteryつまり個人主義とは相異なる結果、対立関係にならざるを得ないことになり、その結果イースターの日取り決定を表向きの議題として開かれたのが六六三年の宗教会議Synod of Whitbyである。WhitbyはLindisfarneとCanterburyのほぼ中間の、海辺の町である。

その結果はローマ側が是とされることになり、集団主義が個人主義を抑えたのである。個人主義の宗教の再生はMartin Luther, 1483-1546を俟たなければならなかつた。Protestantismでは教会よりも聖書を優先する。聖書を読むには個室の

旅の話(二)

方が好都合である。

人類の歴史は先ず自己防衛、つまり利己主義から始まる。徒手空拳の彼として己むを得ぬ仕儀であった。その後の *homo sapiens* の歴史は、彼が自らの利己主義を克服して行く紆余曲折ということになる。理知に目醒めるまでの長い期間、人間は感情、情緒を主軸として生きるしかなかった。主情主義の時代である。宗教はこの時期の産物と考えられる。やがて人間が理知に目醒める時期が来る。欧州の歴史で云えば *Renaissance* である。現在のわれわれはこの時期に生きていることになる。Re は *again* (再び) の意であるが、これは言

うまでもなく古代ギリシャの再生ということであろう。先日テレビでアレクサンドロス大王の東征の跡をたどり、それがやがて佛教の中にも滲透して、行きつく先が日本であったという趣旨の番組を興味深く見たが、ここにも綿々たる歴史の流れが感じられる。

Homo sapiens が本当に *sapient* (賢い) になるには、主情と主知を統合した。新しい境地が啓かれないければならない。主知主義が事の終りではあるまい。ユートピアは未だ実現していない。前途は遼遠であるが、洋々と考える手もある。

(二〇〇四・一・三二)

旅の話 (一) 補遺

渡辺美知夫

上海の大通りを歩いていると、一軒大きな書店があったので入ってみた。三方が天井に至る書棚になっていたが、その大部分が灰色で、片隅のほんの一部が色とりどりに見えた。その灰色がすべていわゆる海賊版であったのだ。どうやら大部分が英米その他ヨーロッパ文学の作品らしかった。値段はこれが又びつくりする程低廉であった。

僕のような貧書生にとつては、これは誠に有難いことではあるのだが、他面出版元にとつては、許しがたいことであろうと思われた。

私は記念に Somerset Maugham の *of Human*

Bondage を買ひもとめたことが記憶にある。パリの軍票を使ったことまで思い出される。

近頃は海賊版が、その範囲を広げて、農作物、機械機器から電子機器にまでも広がっているらしい。

私のような生産面に係わりのない人間には、くすぐったい思いだけで済む話だが、生産者自身にとつては勘弁なりがたい問題なのではあるまいか。一介の旅人である私にも、人間倫理の問題として、複雑な感懐を催させられた経験であった。